資料３

令和５年度近畿地区社会教育研究大会　滋賀大会報告

報告：高槻市社会教育委員　田中潤一

１　大会概要

令和５年９月８日（金）、立命館大学びわこ草津キャンパスにおいて「地域への愛着と誇りを育てる社会教育」を研究主題として開催された。冒頭挨拶では、本大会において、人々の学びを通して地域への愛着を育て、また地域を活性化させ、多様な人々とのつながりを進めることが本大会の大きな目的であると語られた。基調講演として「ここで　ともに　ぶじに　生きる」（上田洋平滋賀県立大学特任講師）が行われた。分科会では「１学校・家庭・地域の協働（京都府）」、「２地域づくり（和歌山県）」、「３青少年教育（兵庫県）」、「４家庭教育支援（大阪府）」、「５人権教育（奈良県）」がそれぞれ開催された。来年度については、開催地は京都府であり開催時期は令和６年９月６日（金）、開催場所は京都テルサで行われることが報告された。

２　記念講演　講師　上田洋平氏　演題「ここで　ともに　ぶじに　生きる」

記念公演は滋賀県立大学地域共生センター特任講師で米原市・高島市社会教育委員の上田洋平氏により行われた。上田氏によると、これまでさまざまな活動は、「分けて集めて縛る」（同質のものを集める）ことを基準として行われていたが、これからの時代は「混ぜて散らして繋ぐ」ことを方針とすることが望ましいとされた。また地域の重要性を力説する上田氏は、昔の人々は自分の村と繋がって生きていたが、現在そのようなつながりを自覚している人がほとんどいないことを指摘した。経済合理性だけではなく、生命の共生原理の世界が示されねばならないとし、上田氏はこの事態を、地域共同体には「ビジネス」モデルではなく「ブジネス」モデルが必要であると表現した。ビジネスモデルでは、「いますぐ」「わたしに」「見返りを」という３点が基軸であったが、それに対して同氏の言う「ブジネスモデル」とは「ゆっくり」「みんなに」「お返しを」という３点を基軸とし、この観点が地域を建て直すことを可能とすると提唱した。また同時に社会教育の到達点もここにあるとされた。1000 年以上の時間軸で生きてきた地域共同体を重視し、それぞれの風土に根差した「持続可能なブジネスモデル」を構築することが肝要であると述べられた。

また上田氏は「つながりが病んでいる」という問題について考察を行った。現在社会においてさまざまな問題が起きているが、後で考えると「一言かけてくれれば」ということが多い。しかしその「一言かける」ということが難しくなっている。またコロナの時期、コロナに罹患することへの恐れよりも、隣人との関係が崩れることへの恐れの方が人々の間に強かった。

このような現状に対して上田氏は「つながり」を取り戻す活動を行なっている。とりわけ同氏は大学生を地域社会に導き入れ、地域社会の活性化を行なっている。同氏の活動では、

地域に若者を導き入れることによって、さまざまなことを誘発している。学生が地域を活性化させるだけではなく、地域の近隣他出子を呼び込み、さまざまな人々が共に地域を活性化させるという結果をもたらした。同氏の活動では、学生の関心からさまざまな活性化が生まれ、多くのつながりが生じた。社会教育委員の役割としても、さまざまなつながりを支援することが必要であると考えられる。

3　分科会報告

分科会１「地域と学校の連携・協働を推進する（京都府）」に参加した。本分科会では京都府長岡京市における、地域と大学との連携について紹介された。まずは京都府長岡京市の活動紹介、とりわけ地域学校協働活動におけるボランティア活動、たとえば「すくすく教室推進事業」、「中学校教育支援事業」などの事業が紹介された。さらに長岡京市と立命館高等学校との連携について述べられた。立命館高校は長岡京市に位置するにもかかわらず、生徒の中には長岡京市について知らない生徒が多い。長岡京市は、地域に役立つ人材の育成が重要であるとの立場から同校との連携活動が行なっている。たとえば市役所が抱える課題（ガラシャ祭を活発にするには、など）について、立命館高校の生徒とともに考える活動などが行われている。次に長岡京市と京都西山短期大学との共同プログラムが紹介された。大学の研究を社会に還元するのは大学の務めの一つであるとの立場からさまざまな講座が提供されている。具体的には中央公民館でさまざまな講座が開設されている。以上のような活動を通して、社会教育の意味を再度確認し、社会教育委員が自覚を持ち活動することの重要性が述べられた。

以上